

『慶應マーケティング論究』
第2巻 (Spring, 2004)

巻頭言

慶應義塾大学 商学部 小野晃典研究会
第2期ゼミ長 田中大介

小野晃典研究会第2期生としての生活も早2年が経つ。思えば、入会初日、我々はその先の明るい研究生活を思い、希望と向上心に満ち溢れていた。そのせいか、皆の目は「何かをやり遂げたい」、「大きな成長をしたい」、「勉強に打ち込みたい」という思いが伝わる、非常に力強いものばかりであった。皆、自分の掲げた目標や向上心に向けて勇気ある1歩を踏み出したのである。それから2年たった今、電光石火の如く駆け抜けてきた研究生活で我々は果たして何をすることができたのであろうか。そして、この卒業論文集に何を刻み込むことができたのであろうか。

研究会が始まって間もない5月、2期生が集まった三田の教室は物々しい雰囲気になっていた。先輩から与えられていた課題のあり方で揉めていたのだ。我々はそのとき、互いの思いをぶつけ合った。課題が何のためにあるのか、何が問題なのかを喧嘩のような口調で言い合った。そして、その日から我々は課題の厳しさにくじけず果敢に向かっていき、先輩の形作った課題を修正し、2期生独自のあり方に変えていった。前期の終盤、我々の課題は質、量ともに厳しさの増す、非常に充実したものとなっていた。この他にも我々は今日に至るまで、本ゼミやサブゼミなどあらゆる研究活動を改良し続けてきた。それらは全て我々2期生の要望、意図に基づいたオリジナリティ溢れるものだった。

夏休み明け、我々は共同研究プロジェクト(三田祭研究論文、関東十ゼミ討論会、学生広告論文電通賞投稿論文)という共通かつ大きな目標を掲げていた。しかしながら、我々は論文作成に際し、様々な壁にあたっていた。いくつものテーマがあげられては棄却され、ようやくの思いでテーマが決まるも研究アプローチが定まらず、ただひたすらに話し合う日々。既存文献を読みあさっては、自分たちの仮説を練り直す日々。ただの1度も執筆したことのない研究論文という壁に我々は膨大な時間をかけて立ち向かっていった。そして紆余曲折の末、生活の全てを注いだ論文が出来上がり、先生をはじめ様々な方から高い評価を頂いた時、我々は共に涙していた。

「現状に満足せず、新しいものを生み出していくこと」

「良いものを作り出すための努力を惜しまないこと」

これこそ、我々2期生が小野晃典研究会で手にした最大の財産であろう。我々2期生は常に現状に満足せず、新しいものを生み出しつづけ、そのための努力もまた惜しまなかった。『慶應マーケティング論究・第2巻』は、こうした2期生の活動の集大成が刻み込まれているものである。それ故、我々の卒業論文集に

は1つとして過去の研究者達の見解にとらわれているものはなく、オリジナリティに溢れ、妥協のない、洗練されたものばかりである。

さて、我々はこの卒業論文集をもって、ゼミ生生活の終焉を向かえる。しかしながら、この卒業論文集は我々2期生の人生の目標達成におけるほんの通過点にしかすぎない。我々はこの先、社会へ向け新たな1歩を踏み出す。そこでは厳しく成果が求められ、学生生活では考えられなかったような試練が待ち受けているだろう。しかしながら、そんな厳しい環境にあっても、我々小野晃典研究会第2期生には、自らの掲げた目標に向かって決して妥協することなく、新たな挑戦をしていきたい。そして、小野晃典研究会での成長の軌跡や良き仲間達と共に取り組んだ日々を忘れず、自信と誇りを持って頑張っていきたい。我々2期生全員がそれぞれの目指す方面で大きな活躍をし、いつしかまた共に小野晃典研究会で学べたことの大きさを確認しあえる日が来ることを心から楽しみにしている。

末筆ながら、我々の良き指導者であり、理解者である小野晃典先生には感謝の意を述べたい。我々が先生や1期生の作り上げたものを変えようとした時、新しいものに取り組もうとした時、先生は何1つ嫌な顔をせず、我々に真摯に向き合ってくださいました。それどころか、そうした活動を推奨さえしてくださいました。また、時として我々のわがままとも言える行動や、誤った行動に先生は優しくご指摘をしてくれた。このような先生の包容力がなければ、我々2期生は小野晃典研究会で多くを学び、功績を残すことはできなかっただろう。2年間に渡り、ご自宅を開放してください、いつ何時も決して手を抜くことなくご指導をください、我々に付き合ってくださいました小野晃典先生にいま一度感謝したい。また、我々の後輩には、1期生、2期生の作っていった伝統にとらわれることなく、自分達に合う、より良い研究活動を目指して努力を重ねて行って欲しい。決して現状に満足せず、妥協せずにより良いものを作り出していくのが小野晃典研究会の良さの1つなのだから。

2004年1月吉日